

## クダケスタン・ジャポニ（イランの日本人幼稚園）①

進藤 君 枝

ザクロス山脈の一部エルブルズ山頂に、まだ雪が残る一九七七年の四月はじめ、新しい任地イラン国テヘラン市のメヘラバード国際空港へ到着しました。空港はノールズ（イスラム暦の新年）のためかシーンと静まりかえっていました。あたりには女性の姿はほとんどなく、ほりが深く鋭い人をにらみつけるかのように思える目つきで、じっと私をみつめるイラン人に接した時、異国にきたのだなと心がひきしまる思いでした。

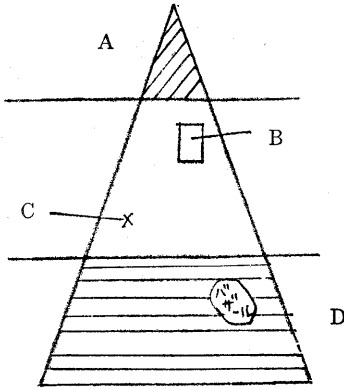
空港正面には、めずらしい飾りがかざられていました。わが国

のお正月には、おそなえを飾り祝いますが、イランでは特別の布の上に発芽した鉢・コーラン・鏡・着色された卵・ロソク・金魚を入れた鉢・リンゴ・酢などベルシャ文字の頭文字でスイーンではじまる品物がならべられます。どの家庭にもこのような飾りが用意され、これを囲んで新年を迎えます。新年を家族で祝ったあと、家長が子ども達にエデイ（お年玉）を配りそして年始まわりにでかけるのです。このノールズの期間が二週間あり、この期間を利用して旅行にでかける人達が多くテヘランの町は静かにな

ります。

幼稚園役員K氏の車で任期中滞在场所となるアザディガン家へ向います。アザディガン家は町の中央部にあります。テヘランの町は坂の町といわれ北部と南部にわかれています。人口分布は、ピラミッド型で北道の山頂近くには、少数の上流階級の人々の住居がたちらび底地に近づくに従い貧しい人々の住居がふえていくといわれます。

日本人の多くは、高級住宅地の一部に住む家庭が多く、日本人幼稚園もその中に位置しています。テヘランの交通は、地下鉄・電車などではなく、バス・自家用車・ハイヤー・乗り合いタクシー



- A……超高級住宅地ミエミラン地区  
(革命の時、海外へ脱出したもの多い)
- B……日本人が多く住んでいる地域
- C……アサディガン家
- D……革命を支えた人々が住んでいる

ハイヤー	1時間	300リアル
オレンジタクシー	1区間	15リアル
		その後5リアル増
バス	全区間	15リアル

1リアル 約2.5円

のみで行動しなくてはなりません。乗り合いタクシー・バスは町に近づくに従い多くなり、幼稚園の近くでは、あまり利用することはできません。アザディガン家は、この乗り合いタクシーが(通称オレンジタクシーと呼ばれます)自由に利用できる場所にあります。大きな通りには、いつでもこのオレンジタクシーが走っています。道ばたで大きな声で行き先を告げますと、その方向に行く車がとまります。テヘランの町は碁盤の目のように整備されており、交差点には大きな広場があります。広場の名前・上へ下へ・生まれ・これだけを覚えれば運転手に行き先を告げられ自由に乗れます。日本人の間では、このオレンジタクシーを自由に

乗りまわせる人はあまり多くありません。私は日本のタクシーに比べ、便利で安く合理的なオレンジタクシーが好きでテヘラン到着の次の日から、地図を片手に乗りまわしていました。

テヘランの気候は、海拔一二〇〇メートルの高地にあり夏には四〇度以上の厳しい暑さになります、が乾燥しているため余り不快には感じません。冬は零下になり四〇センチ程の雪が積ることもあります。夏と冬が長く春と秋は、あっとい間にすぎ去ってしまいます。雨は年間を通して少なく、私が日本から持っていった傘も、三年の滞在期間中に、二、三回しか使用しないで済みました。テヘランの町には手入れがされた大きな公園、木々が多くあり町の人々は緑を大切にします。日本では余り手を加えなくても緑は育ちますが乾燥度の高いテヘランでは、十分に配慮しなくては、緑は育ちません。それだけに育った緑は大切にされるのです。メインストリートの旧パーレビ通り（革命後モサデック通りに改名）には、朝夕に山の手から下町にむけて水が流されます。下町の方ではその水を利用して洗たくや食器洗いがされているような場所もあります。通りの両側には充分な太陽と人々の努力による水で育った大きなチエナールの木々がそびえたっています。ノールズが終るころから暖かくなり短い春を迎え、五月中旬ごろからは厳しい夏がやってきました。チエナールの新芽もめぶきから

あっとい間に二〇センチ位の大葉に育ってしまふです。夏の夕暮れには、どこからか決まった時間にすずめの大群があらわれ、旧パーレビ通りの一道をにぎわせるのです。秋近くなりますと不思議なことにその大群は、どこかへ消え去ってゆきます。

### ——アザディガン一家——

イランでは、ファルシーと呼ばれるベルシャ語がつかわれます。上流社会の人々はフランス語・英語なども使用しますが、私が接するイラン人の多くは、日常「ベルシャ語」を使用します。

幼稚園の仕事を終え、帰宅してから夕食を済ませアザディガン一家と過す時、私にとって楽しい一時でした、イランの習慣でイラン女性は余り買い物にでかけません。アザディガン家も主人が毎日出勤前には山ほどの買い物をしてきます。イランの家の多くは、レンガ作りで床にはじゅうたんが敷かれています。上流社会の人々は西洋式の生活をしていきますが平均的イラン人の家庭では、入口で靴をぬぎじゅうたんの上に直接座ります。アザディガン家の夕食後は、じゅうたんの上にビニールの敷き物（テーブルがわりに使用）を敷き座って果物やチャイ（煮出した紅茶）を飲み家族で団らんの時をもつのです。乾燥しているためかイラン人

はよくチャイを飲みます。どこへ行っても何杯もたされます。砂糖は、ガンドという固い砂糖がだされ、それを先に口の（に含んでおき、そのあとチャイを飲みます。これがイラン式飲み方です。果物もリンゴ・ミカン・数種のぶどう・さくらんぼ・スイカ・ザクロ・桑の実・メロン・きゅうり（イランでは果物として食べます）四季それぞれの果物を充分味わたったのもこのアザディガン家の夕食後の一時でした、イラム暦では金曜日が休日となりません。木曜日には、家族・知人が集まり雑談の時間がよくもたれます。このような集まりには、親族・親しい知人のみでメンバーがいつも決まっているようです。親族のつながりが深いこの国では、余り他人を快く受け入れることはしません。そのような面では大変閉鎖的な社会です。

イラン人の中には、詩を愛する人が多くいます。地方都市・イスファハンやシラーズには、大きく美しく整備された有名なベルシャ詩人ハーフェーズやフェールドシー等の墓があり観光地となっています。アザディガン氏も詩をつくるのが好きで良く聞かされました。子供達の誕生日には、その子供のために必ず詩がつくられ誕生パーティの場で披露され子どもの成長を喜びあうのです。

イスラム社会では、女性が積極的に外にでることを嫌やがります。

外へでる時は、チャドール（体全体を包みかくす布）を頭からかぶります。教育を受けた人々、上流社会の人々はこのチャドールの使用を好みません。アザディガン夫人は仕事をもち進歩的な考えを持った人でしたので平常は使用しません。しかし毎日行なわれる家庭での午後の礼拝時には、白いチャドールをつけメッカの方向にむかって額を地につけ祈っていました。モスクイスラム教の礼拝堂からは夕暮れ時になりますとスピーカーを通してコーランの調べが流れます。幼稚園近くの大きな家の門番も夕暮れ時には、メッカの方向にむかってコーランをとえます。そして身を清め祈りの一時をもちます。夕暮れ時のコーランの音を聞いていますと、今日も一日が無事終り又新しい明日が出発するのだなと思わずにはいられません。

テヘランの一日は、朝早くからはじまります。町の中央通りは、七時半位には通勤・通学の車で混みあい、午後一時ごろから四時位までは、昼休みとなります。多くの商店・マーケット等はシャッターをおろし昼食をとり昼寝です。

真夏の暑いころは、道ばたの木かげでゆっくりと昼寝をしている人もみうけられます。日本人にとって、午後の三時間も休息の時間など考えられません。私もテヘラン入りしたころは、仕事を終え「さあ！町へ出発だ」とはりきってでかけると、町は

シーンと静まりかえり人の姿もあまりみられません。退屈で困りました。しかし夏の暑さを体験したあと、この地で生活してゆくためには、いかにこの午後の休息時間が大切なのかがわかりました。なまけものではないのです。イランの気候・風土の中で生活する人々の生活の知恵なのだということを感じられました。

アザティガン家には、ナーデルという大学受験をひかえた青年がおりました。彼も私の良き話し合い手でした、不思議なことに、当時知識がある人・良き職を得ている人程、「イランは良くない。このままではすべてがダメになってしまう。こんな国から早く逃げだすのだ」という声を聞いたのです。政治・経済・価格・交通事情全ての面から不平不満を言っていたのです。私は日本人として日本の良い面も悪い面も知っているつもりです。でも日本が好きです。良い国になって欲しいと思います。

ある日のこと、

「ミス・シンドウ、イランはためなのだ。全てがダメなのだ。全てがかわらなくて、どうすることもできないのだよ。」

ナーデルは言いました。

私にはわかりません。私のつたないファルシーと英語で

「何故不平不満ばかり言っているの？ 不平不満があるのな

らば、何故行動しないの？

若者こそ行動できるのよ。行動しなくては……そしてあなたたちの国を良い国にしなくては……」

彼はだまって首を振るだけでした。

「ミス・シンドウ 決してこのことについて、他の人の前では言っていないよ。」

我々の国では、王様の悪口、政治の話は口に出してはいけな  
いんだよ。S A V A K (秘密警察) がいつでも見張っている  
のだから……」

ナーデルは大変純粋な青年でした、彼なりに考え苦しんでいた  
のです。イランの国内で抑圧されていた人々の力が一年後の王制  
打倒の大きな原動力となったのだと思います。

革命後の一九七九年六月、テヘランに戻った時ナーデルは、「ミ  
ス・シンドウ、この本を読んで下さい。そして少しでも我々の信  
ずるイスラム教について知って欲しい」と一冊の小きな「イスラ  
ム革命」という本を手渡されました。彼の顔はいきいきと輝や  
いていました。

何もかも新しい生活と発見で、一年を無事終え新年を迎えよう  
としている時、アザティガン氏が「さあ、山へたき木を拾いに行  
こう」と誘いにきました。山といってもわき水の流れているとこ

ろには、木が点々と繁っていますが、他の所は水がなくても育つとげをいっぱいもった雑草のようなものはえている所です。赤土の土漠と呼ばれている所です。たくさんの乾燥しきった小枝をアザディガン家の人々と拾いました。アザディガン家だけではなく他の家族もたくさんきていました。どの家族もそれらのかれ木を山のように車に積んでかえっていきます。家では新年を迎える為に大掃除です。新しい衣類の買い出しで、衣類品店は満員です。

ノールズ前の最後の水曜日は、「チャールシャンベスリエー」と呼ばれ集めてきたかれ木が庭や道路につまれます。

日がくれあたりが暗くなったころ、子ども達の歌声が聞えてきました。

お前は私から黄色（病い）をとり

私はお前から赤（健康）をもらう

お前は私から冷たさをとり

私はお前の暖かさをもらうのだ

道はたに集まった子供達は、この歌をうたいながら火をとびこえて遊ぶのです。そして新しい年への準備をするのです。

今回は日本企業の駐在員の子弟としてテヘラン滞在していた子ども達とすごした日々、イランのクダケスタン・ジャポニ日本人幼稚園について綴ってみたいと思います。

